

研究資料

公刊

長谷寺縁起 詞書 宮次男

底本は幸節家本を用い、長谷寺甲本をもつて校合した。原文中、異体文字は現行のものに改めた。改行はすべて原文通りである。

長谷寺縁起上

寛平八年二月十日依 勅菅丞相の勘出

せしめ給ふ長谷寺の縁起にいはく吾遣唐

大使中納言從三位兼行左大辨春宮大夫式部

大輔侍從菅原朝臣某かたしけなく寺官にかして

大安寺に附す因に法師の請によりて長谷

の靈寺(の靈ナシ)により入る爰(るナシ)にすなへち勝絶たる

靈場(を)にむかひ大明(一度)なす流記を見るに精氣

ひとたひ通して靈夢を得たり十一面堂の

しも二百餘歩くたりそはたちて岡あり

雲(懸ナシ)の懸梯となつく高こと幾計ならず厥頂

より雲にかまへる三の金梯ありて金峯

山にいたる三たりの藏王おのく山神才の

もろくの眷屬を率して梯を踏で影向

す忽に十一面堂に入ておのく五色の蓮花

をもて寶前に捧則其故をもとむるに藏王

權現答てのたまはくこの山ハ功德成就地諸

佛經行の御是兜率天宮觀世音院也

并聲聞(此)この山に住して功德をほしひまゝにし

諸天神祇此山に在て威驗をふるふ專四海の

安寧をおさめ鎮に一人の寶祚をまもる我ぞ

彼冥誓に融して日々に來て衆生を利益す

と云々爰に彌信仰ふたこころなし仍行基并

國符の記七卷并本流記の文三卷本願上人

上表の狀一通を鏡とす土の中に花金をあつ

め塊を去て縁起文一首を勘出す

〔繪1 道眞縁起文を勘出するところ、夢想〕

聖廟長谷寺に參して國府記(縁起を見并)靈夢を

感する所

〔長谷寺より「金峯山に」□□して三の「金梯あり」

三鉢藏王」影向の(所雲の)梯也 (聖廟縁起)を

勘出して「一丈三尺の」板に書て「室にうつ」

夫南閭浮提陽谷輪王所化下礮馭廬嶋水穗

國泊瀨神河浦に觀音利生の道場あり此砌に

二の名あり一にハ泊瀨寺又云本名を得たる事ハはせ

の河かみ瀧藏の社を脇して天人所造の毗沙

門天王います其御手の寶塔流て此山の麓

神河の瀨に泊る武内の宿禰ト筈して云斯

天の德を授け地の榮を表と云々則崇て北の

峯西北のすみに納仍舊號三神をあらためて

泊瀨豐山とす其後三百餘歳を経て道明

聖人これを石室にうつす其より此山繁昌

し觀音應現す故に里の名をとりてなを(なをナシ)

寺號におく是天武天皇更道明聖人に

勅して西の嶺に石室佛像并三重塔

を建立す

〔繪2 瀧藏より毘沙門天の寶塔流れて泊瀨にと

まる。道明これを石室にうつす〕

二にハ長谷寺又云後大悲利生の谷長によりて

此稱を得たりこれ北嶺に德道上人聖武天皇

の勅をうけ給て觀音の靈場を建立す其上人

ハ播磨國揖賀郡の人俗姓ハ辛矢田部の造

米丸也是法起并の應化第三仙人再誕母を(は)

菽子と申き夢に明星天子くたりて口中に

入とみて物をむかこくして十六ヶ月を経て

齊明天皇即位二年辰丙歲九月十八日の日出に

空もはれ風靜にして慈母をなやます事

もなくふところの子を放かこくにしてうみ

たまふ

〔繪3 德道の誕生〕

上人の御母腹に明星」いる所 上人出腹(胎)の所

德道上人生年十一にして考にわかれ十九に

して妣をはなれ給才を藝て跡をあらハす

則よく五常を存し能四恩をおもふ遂

彼二親の菩提に廻向し佛道を求かために

遙本郷を去て異域にうつる因縁(相)感して

此山に來れり慈悲の師に遇て俗姓の號を
改めしむ干時天武天皇即位四年二月
五日生年廿にして出家受戒(す)

〔繪4 徳道の剃髪〕

上人出家の所

則(隙)習學いとまなく勤行ひまなし終に佛
法を得て修驗ならひなく精進多年なり

〔繪5 徳道勉學〕

上人修學の所

上人累年の間所の相を検知するに上求
井の山高く下化衆生の谷深し四神相應の
靈場一天無双の勝地なり是て知ぬ此所ハ
古仙修行の跡衆妙吉祥の砌也吾此山に
精舎をひらきて日域の生を利せんと心中
思慮して山内をみまハすに北峯に金色の
光を現す彌怱て日々に其所にゆきて
勤行精進する程に恒に此事をみる(ほと)

〔繪6 徳道北峯に金色の光をみる〕

うつゝに本願徳道」上人瑞相の光を見」伽藍開發
の心を」興す所 觀音の寶」座未あらはれ」さ
る前に地中」にして光を」放つ(つナシ)

上人无(非)上苦提(堅)の心さへかたくして終に大師
道明大徳に語て云佛像をつくらんかために

御そ木を求とおもふ大師答ていはく善哉不
遠神(川の)河浦に靈木あり尤吉なり恠哉今夜
一の夢をみる數輩異形のたくひ彼木を
中にして坐烈(座)す其中に一人の童子蓋を
もて木を覆ふ又木の下に白衣 老翁あり
其形まことに徹也我向ていはく翁公は何
人そ又何事に此所に住するを答て云く
我是三尾の大明神也此木をまもらんかた
めに本國より片時もはなれず諸の眷屬を
ひきゐて來る又蓋をとる童子は 當山
守護の童子也靈木彼請によりてこの
山に來る所の相應綺(なりと云々)の奇瑞也云々

爰に寤然として夜を曙す程に汝今
請問すと上人謹請給(ふ)

〔繪7 徳道が道明を訪れる所〕
本願徳道上人 師匠道明大師

上人長谷の郷の古老に木の由來を尋るに
答ていはく所命の木此土に來てより以來
郡郷の人民おたやかならずをのく力(各)を
あハせて遠く他の里におくらんとおもふ

〔繪8 徳道、長谷の古老と語る所〕
上人泊瀬の古老に」木の由來を尋

古老語ていはくつたへきく近江國三尾前山
の白蓮花の谷に大なる臥木あり長こと十

餘丈の楠(也)なり此木より常に光をはなち
異香をくんす又諸天來下して白蓮花を
持て此木に散す其花此木に屬して蓮花
を生す其色又白色なり如此其谷にして
多年を経たり故にいまに白蓮花か谷
といふ。

〔繪9 白蓮華谷で天人木に散花する〕
白蓮花か谷にして」奇瑞あり

又云繼體天皇即位十一年雷電風雨大に
命して洪水あり此木彼谷より流いつ

〔繪10 雷電風雨の中に木が流出する所〕
童子 三尾

又云志賀の郡大津の里にある事七十年
里の人のいまに木の心をしらすして切とる
程に郡郷の家々門々宅をやき病を發して
よろつ不吉なりければ其故をうらなふに此
木のたより也聞者おかす心なし

〔繪11 大津の人々木を切り、祟をうける〕
大津 里のわつらいを」うらなふ

又云大和國高市郡八木の里に住する小井
門子といふ女人因縁(ありて)あて父母ならひに夫ために
佛像を造たてまつらんとして用明天皇即位
元年をもて八木の辻にひきをく木のたより

よりて小井門子死去しぬ其後彼里に經廻する事三十餘年郡郷の家々門々又不吉なり則葛下郡の人出雲臣大水沙彌法勢十一面像を作とす(造らむとす) 推古天皇

即位七年に葛下郡當麻郷にこの木を(引置)ひきをく願をはたさずして法勢又命つきぬ其後此里に經廻する事五十餘年如此所にして不吉なり

〔繪12 小井門子木を八木に曳く〕
近江國より大和へ引こす繁事か故に所々に引移事を畧す 門子死去の所法勢命過を畧す

又云天智天皇即位七年城上郡長谷の郷神河の浦をさしてひきすてさりぬ其より後此里にとまる事卅九年彼木を

おかすものおたやかならすといふ徳道上人此言をきいて彌靈奇あるへき事を知て里人にこひうく即古老のとねとも

〔繪13 徳道里人から木をもらいうける所〕
其後徳道上人十五年のあひた精進修行してあかめ重したてまつれとすへて願をはたすへき事なし只冥助を仰處に夢に東嶺に三燈をみる其傍にあやしき人ありて三

燈ハ三世の利益を表する也彼嶺に靈木をひきあけて佛像をつくるへしといふ

〔繪14 徳道、夢にあやしき人を見て靈木を東嶺で佛像につくるべきを示される〕
長谷に三世の利益あるへき事を示す所

をしへのことく養老四年二月のはしめに靈木を東嶺にひきあけて庵をむすひ香花を備てあつく三寶の加被をたのむ夙夜のつとめおこたらす重て願をたて彼木を禮していはく聖朝安穩藤氏繁昌乃至法界平等利益のために十一面の像を造たてまつらんとおもふ大悲の弘誓我願を感せは靈木自然に佛像を成給へと禮拜す然同八年七月に房前朝臣大和國斑田の勅使をつとめられし次に狩のために此嶺に打立ところに山の中禮拜の音をきく

〔繪15 木を東嶺に引きあげる所、房前朝臣が狩をする所〕
眞の告にまかせ東の峯へ靈木を引上る 房前朝臣御狩に出給ふ所

勅使禮拜の音をきくにあやしきのおもひをなして庵のまへに行て問云上人なんそ兩家を祈か答云つたへきく第六天 魔王我朝をおかさんとせし時天照太神法性宮に居して此事をみ大悲のあま

り春日大明神と契云汝と共に日域にあまくだて我は國主となり汝を臣家として彼土の衆生を益せんと云々其めくみにむくひて忝二神此土の塵に交其二神の孫として兩家此國をおさむ佛法の興廢ハ兩家にあり又兩家の運否ハ佛法によるへし此兩家佛法繁昌せはひろく衆生を利しなん吾この願をとけて國土の郡機に應せんとおもふ如此具に佛像を作らん事をひらき申勅使聞云をのつから慶賀の事あらは必助成のために朝廷に奏聞して官物を申くたし精誠を融して懇念を運と約束畢

〔繪16 房前、徳道の禮拜をきく、その理由をたずねる〕
房前朝臣禮拜の音を聞所 兩家を祈由を問所

祈念に酬て房前朝臣不幾して勅賞を承り榮名を泰すいよく聖人の徳に歸して解狀を勸む則神龜元年正月一日解狀を奉る同年二月廿二日 勅す其年三月二日宣下せらる同月十八日に香稻三千束下行

〔繪16 勅して稻三千束を集める所〕
同六年四月八日辰剋吉日良辰を撰定て御衣木を加持す其役ハ道慈律師也

〔繪18 道慈律師を導師として御衣木加持を行ふ〕

〔繪18 道慈律師を導師として御衣木加持を行ふ〕

〔繪18 道慈律師を導師として御衣木加持を行ふ〕

〔繪18 道慈律師を導師として御衣木加持を行ふ〕

道慈律師 御衣木

同日始て時をうつさす三ヶ日の間に佛像を
(造奉) 作たてまつる高二丈六尺そのたくみハ稽文會

稽主勳也佛像を造そめて第二日にあたるに

早却吉窮の津麻呂山に入て薪をとらんとする

因に佛所にむかふて遙に稽文會をみれハ六臂の

地藏手ことに佛像をけつりきさむ又稽主勳をみ

れハ不空羅索觀音六臂にして或ハのみをとり

或ハかたなをとりて佛にむかふ奇特のおもひを

なして聖人の所にゆきて此事をかたる則遙に

みれはいふかことし共に佛所にゆきてみれハ

常の人なり

〔繪19 觀音像の製作を津麻呂が望見する所〕

〔吉窮津麻呂〕 津丸佛師の「本地を見る所

稽主勳

稽文會

〔津歷上人に「告所」

堂舎の構高下嶮難なりいかせん恒に思歎て

勤行精進するほとに夢の中に金神現して

北峯を指示して聖人うれへ思事なかれ峯

の地中を勘に金剛寶磐石あり其面に金容

坐す上は地際にひとし下ハ輪際をきハむ

其牀に三枝あり枝の頂ことに大悲の菩薩

座して法をとく其「なりかれをもて金剛

寶師子座とすへし我才八部衆おの「諸

眷屬をひきゐて往昔より此山を擁護して

天のことく普率土をまもり地のことく厚群

生をかへりみ此山興する時は形として威をふる
ひ此山をとりふる時ハ幽として福をなすつけ
給へり

〔繪20 徳道、夢に金神から臺座について知らさ
れる〕

金神地中の寶石を「しめす所

夢さむる時天風峯をふき龍王掣電し

大雨時に降て山くつれ石わるゝ音をなす心

肝やすからすして窓より電のひかりをみれハ天

龍八部并八大童子巖をくたき地をほる

〔繪21 大暴風雨の中に 八部衆 八大童子ら寶
盤をほり出す〕

本願上人地引をみる所

〔天龍八部〕等金剛座〕

をあらはす」所

夜あけて現に北峯を見ハ平なる事掌のことし

中に金剛寶あり縱廣正等にして方八尺なり

其面掌のことし綾文ならひに菩薩の行足の

穴あり新像の御足 比較するに敢たかふ事なし

爰に上人よろこひて龍尾寸を出れハ其大小を

しる瑞木すてに奇特なり兼知ぬ此山の餘山

に秀甲なる事を我そのかみ誓 國家に奉

し寮菜にめくみ佛法を興し衆生を利せん

と此願もし成せは早く當山にして大伽藍を

興隆せんと既その願を成す後代の利益も

むなしからし

〔繪22 金剛寶盤上に十一面觀音像をたたせ、禮
拜する所〕

爰に大會をまうけて開眼し奉とす

聖武天皇の勅によりて大般若經一部をうつし

て前皇后帝の萬德莊嚴聖化無盡を祈

たてまつるへしと云々

〔繪23 寫經する所〕
勅を承」經を書

天平五年五月十八日に房前朝臣勅を奉て

長谷寺に付たまふ同月廿日法味を捧音樂を

調て開眼し奉る導師行基聖人咒願義選

大德請僧百口なり于時觀音の頂上より五

色の雲聳て虛空にみてり又造花を散す

るに天花ましはりくたりて共に西方の虛空に

まきのほりてくたらず又供養の夜本尊の

眉間より光をはなつ一夜の間山内みな

金色なり如此事衆會みなみて歸敬せすと

いふ事なし

〔繪24 開眼供養〕

供養の夜本尊の「眉間より光を放つ」山内皆金色
なり

其夜聖人の前に白衣の金剛童子八人^(現)うつゝに

出現して聖人に語^(て)云我才八輩は寶磐石

守護の密跡神也其名をは一岱 石精

護石 青頸 施願 隨念 密跡 施無畏童子

等云則誓云此本尊に歸依を至竭仰をこら

して冥加を祈者をして福慶を保しめ

ほたひを求者をして法理を窮しむ又一ひも

此山に入ものは生々に加護して終に淨刹に

をくりなく此山に住せんものをたとひ行ゆるく

とも我添て勇を生しめん忽一切の道俗男

女魔靈に擾亂せられて遠近より群集して

除愈を蒙かために籠祈ものを魔鬼を避

除して平安を得しめん若官位榮爵福

德壽命を求男をもとめ女をもとめ乃至一切

善惡の事并の慈悲に祈願をなさん者にハ

其所求に隨て満足の使者として佛法

をまもり衆生を利せん又重て云我若功德

成就して自在を得は神通力をもての故に

鎮に國家をまもり四海を保護せん又衆生

有て我寺に歩をはこひ掌を合一草一葉を

もて并に結縁せんものと極重惡業を

造て惡道におつへくとも吾かの苦にかはて

其人をして西方淨刹に往生せしめん

乞誓かくのこし

〔繪25 徳道のもとに八大童子影向す〕
八大童子上人に對して「誓を立本願上人童に」向

て願を發所^(す)

同廿一大般若經供養あり其儀觀音開眼に

おなし但咒願ハ神敎律師題名僧六十

口也其夜皇帝の御夢に東南かたより

光をさして殿に入とみて歡喜極なし

〔繪26 清涼殿の夜景〕

清涼殿にして「天皇靈夢を御」感の所

爰に行基聖人信心良驥歸居の心を慮す終に

百ヶ日の參籠を始第七十六日にあたるさるの剋に

觀音の右脇に忽然として見に金色の童子

化現せり手に金剛の獨古を持す顏貌絶妙

にして面すこしき忿怒なり漸歩來て聖人の

前に居す頗あやしき思問云汝なに事に來そ

答云我ハこれ當山守護の八大童子最末の金剛

使者童子也我聖人に謁奉らんかために來也

と僧あやしみて重て問 則答云聖人しれりや

當山ハこれ三世 諸佛轉法輪の地并聖衆利

生の砌也一袋の峯高そひへて兩部の諸尊

星のこつくつらなり長谷のたにふかく帶て大

悲の利益月のこつくかやく其中に今あらはるゝ

所の金剛寶座に三枝あり上ハ地際に分下ハ金

輪に束す一の枝ハ西土にさす中梵の佛成覺

の寶石なり一の枝ハ清山にあり補陀洛山の觀音

所坐の石也一枝ハ此山にあり靈木に因て金神

しめしあらハすなり此寶石に副て左脇に龍穴

あり無熱池に通す八大龍王并ニ小龍才番を

まもりて來て大聖の左にありて近ハ寶座山

内をまもり遠ハ王法國土を治す九天龍八部

をのく八輩を上首として無量の眷屬寶

座をかこんで守護す又八大童子觀音の右に

侍從して并應化の使者となる又寶座を東

西にあひさる事各三百餘歩にして二の仙宮あり

數輩の仙人恒時大乘經を讀誦して諸衆生に

廻向す東北のすみ仙宮に隣次して平然 地あり

日域大小の諸神寶石を守護する所也うしろの

地中に掘入て十六丈の水精寶塔あり七寶を

もて莊嚴せり其空輪ハ則山頂にひとし是過去

の千佛現在の四佛の舍利を此中におさむ又

未來の諸佛の舍利も此中におさむへし是閻

浮提の福田なり此寶塔并寶石を中にして四方

の角に四天王坐て是を衛護す東山のこし河を

へたてゝ鵝形石あり天照太神影向の石也其石の

南に杏形の石あり春日大明神影向の石也これら

の神石の北谷に又仙宮あり九不動ハ魔を伏して

瀧下にたち天人は佛を讀して山上に居す

一山のうち所として聖衆修行の地にあらすと

いふ事なし此山ハ則秘密莊嚴の土群仙

窟宅の地なり一瞻一禮の輩はなかく三惡

趣をはなれ二世願を成するなりと云々

〔繪27 參籠中の行基のもとに童子來り語る〕

(うつゝに金色の)「童子ありて」行基上人ニ謁する所)

(長谷寺縁起下)

爰に行基菩薩此事をみむといふ則行基を將て龍穴より始て山内をめぐりて悉巡禮せしむ後山に至りて童子のもつ所の獨古をもて山頂を掘て十六丈の水精塔の空輪并諸佛の舍利を拜せしむ

〔繪28 行基童子の案内で山内を巡禮す〕

行基并童子を先達として「告示靈所に向則諸の冥衆形」を現して行基に對す 實生の龍王「東峯に影向」今は龍高場」といふ (八大龍王)

(八大童子)

弓つきの龍王東峯に「影向」今は弓つきの尾といふ「又は前山といふ

仙宮仙人經を「誦て衆生の泰平」を祈

(註)幸節本 剎落長谷寺

本で 日域大小「諸神影」向の所

水精寶塔「掘出所す

觀音堂

天照大神影向

石

春日大明神「影向所

不動魔」を降伏多羅尾」瀧と云

天衆大聖を「

供養する所」今は蓮花か」峯といふ

(蓮花谷の上

也)

重云此山の秘密莊嚴せるをみんと思ふ童子答云是肉眼の及所にあらず只聖人兩部の三摩地に入へしといふ則ことはに隨て其三昧に入

山内皆密嚴の土にして兩部「諸尊彌輪せるを拜見し奉良久して聖人共に寶前に還

童子前を立て觀音の後にゆきて則みす

〔繪29 行基 三昧に入り兩部諸尊一五佛をみる〕

泊瀬山皆兩部の「諸尊とすか但事」しけきによりて五佛」はかり書

百日すてに滿て行基菩薩本寺に歸たまふ此

事一々に朝廷に奏て重て佛殿を造かために

白瀧一萬段を申下す又徳道聖人上下の諸

人を勸進して造營を始む天平七年五月

十六日に棟あけなり天裁をかうふりて御倉司才

善の綱のために線糸三千五百兩施入す

〔繪30 行基事の由を朝廷に奏上する所、下賜の

品々を集める所、本堂の造營、上棟の所〕

行基并伴の「事をみて聖武」天皇に「奏して」重

〔勅録を申下す所〕

造營をはしむ

堂舎のかまへ悉成て同十九年九月廿八日に供養

し奉る請僧百口導師菩提聖人咒願行基

菩薩なり瑞應一にあらす異香會ニ場薫し

紫雲こくうにわく天人影向して音樂を奏し

天花を散す衆會みなみて奇特の思をなす

其よりこのかた上一人より下萬民にいたる漢

家本朝悉歸敬し奉也

〔繪31 落慶供養〕

天人來下 呪願行基并「殊化身 導師并僧正

普賢應現

(長谷寺甲本)

爰に聖武天皇御位をすへらせ

給て後天平勝寶四年十一月十

六日に臨幸則御自筆の最勝王

經壹部并法花經一部を以大聖

の寶前に納同月十八日に

供養し奉る數曲の舞樂を奏

千口の請僧を囑導師は隆尊

律師なり

(シャトル本) 九此繪は首尾みな聖廟御製作の

緣起の文に任て更に餘事を交えす

但此一段はいまた長谷寺を拜せざる緇素

のために緣起以後の名所當寺の器界お

交ゑて大概をかき知しむる者也

〔繪32 聖武天皇の臨幸及び長谷山内の諸堂宇〕

大鳥居 手力雄大明神

(法皇) 臨幸御車

惣門 徳道上人御廟「本願院といふ 大河大

明神 緣起勘出「北野」大明神「今は與喜」と

云

比うゑを八しほの岡といふ「又は紅葉の岡と云」

くれなるの八」しほの岡の紅葉」はをいかに「染

よとなを」しくるらん

賢環「僧都」勅約」を奉所^(ところ) 車屋^(ナシ)とり 仁王^(三)

堂 道明大徳御廟 花下坊又は「櫻本の坊と

も云 雲の梯 雲井の坊あり

はつせ山「雲井に」花のさき」ぬれは「天の」川

なみ」たつかとそみる

新宮也^(社あり)□□□ 二本杉

（はつせ河二本ある杉」としをへて又も「あひ」みむ」

二もとある杉」

氣比大明神」影向石 十三重 一間四面」の

二階堂あり^(四所) 三社^(三) 鐘樓

夕霧に梢も」みえず泊瀬山^(はつせ)「いりあひの」かねの

聲」はかりして^(音)

神^(神殿)□「諸神」勅請^(神) 觀音堂 寶護大明神」影

向石 灌頂堂」後白川」御願^(河院) (護摩堂) 御經

藏 庫 寶幢大明神」影向石 閻魔堂^(ナシ)

本長谷寺」天武天皇」之御願今」は本堂と云(也)

三重^(ナシ)塔

奥院之惣門^(ナシ) 塔^(ナシ) 往生院^(ナシ) 長僧坊^(ナシ)

同十九日の夜 天皇御夢想の事あり勅によりて^(のナシ)

おなしく十二月廿日はしめて寶帳を懸たてまつる^(奉)

則この伽藍においてハ永代に及て聖朝安穩寶祚^(の由)

延長國土泰平萬民快樂を祈り奉る^(奉)へきよし

賢環僧都勅をうけ給りてこれを門徒に^(承)

つたふ勅約の金札をもて御寶前におさめ^(納)

たてまつる^(奉)

〔繪33 寶帳を本尊にかけめぐらす〕

（勅によりてはしめて御帳をかく）（賢環僧都）

いまこの伽藍開發の一途ハ常の儀にあらず道^(今)

場をいへは諸佛^(轉)法輪の地秘密莊嚴の土三際^(災)

壞劫にも動へからず四魔靈鬼も威をうし

なふ砌也檀主 聖武天皇ハ觀自在尊の化現^(井)

本願徳道聖人ハ法喜菩薩の垂跡開眼の

導師行基聖人は文殊の應現供養の導師^(井)

天竺菩提法師は普賢の再誕なり

長谷寺縁起下